

# 日本皮膚科学会東北六県合同地方会 学術大会第 402 回例会 澤村大輔教授退職記念大会 —— WEB 開催 ——

諸事情により、学術大会、運営委員会、健保委員会はいずれも WEB 開催のみとなりました。現地会場はございませんので、ご理解の程よろしくお願い申し上げます。

- 学術大会 日時：2023年11月4日（土）10:00～19:05  
2023年11月5日（日）10:00～17:10
- 運営委員会 日時：2023年11月5日（日）9:20～9:50
- 健保委員会 日時：2023年11月5日（日）9:20～9:50

《お知らせ》

1. 一般演題は発表時間 7分、質疑3分、スライド供覧は発表時間 4分、質疑2分です。1件あたりのスライド枚数に制限はありませんが時間厳守をお願いします。  
WEB での発表方法につきましては、対象の先生方へ別途ご案内差し上げておりますので、ご確認をお願い致します。
2. 筆頭発表者は該当する利益相反(COI)状態について開示願います。所定様式は、日本皮膚科学会 HP を参照願います。
3. 日皮会誌用抄録：プログラム抄録をそのまま使用します。変更がある場合は学会当日までに下記事務局までお知らせください。
4. 参加費（3,000円）のお支払方法につきましては、別途ご案内差し上げます。

日皮会東北六県合同地方会学術大会第 402 回例会事務局（当番校：弘前大学）  
〒036-8562 弘前市在府町5 弘前大学大学院医学研究科 皮膚科学講座内  
TEL：0172-39-5087 FAX：0172-37-6060 E-mail：derma@hirosaki-u.ac.jp

### 【皮膚科専門医後実績】

本学会は、新専門医制度「皮膚科領域講習」の受講単位として、以下の一般演題を単位認定しております。（＊各1単位）

■11月4日（土）一般演題Ⅱ 14:00～16:00

■11月5日（日）一般演題Ⅳ 14:00～16:00

オンライン聴講による単位取得：聴講単位が認められているセッションについて、開始～終了まで視聴いただいた聴講ログを元に付与します。後程、ご自身の日本皮膚科学会マイページにてご確認ください。

11 月 4 日（土曜日）

【一般演題 I】（10:00～11:50）

セッション 1-1（10:00～10:50）

座長：山川 岳洋 先生（秋田大）

1.（ス供）TARC が病勢に related した水疱性類天疱瘡の 1 例

○皆川智子（みなかわ さとこ）、松崎康司、中野 創、澤村大輔（弘前大）、会津隆幸（弘前市）

85 歳、女性。5 カ月前から軀幹四肢に掻痒伴う紅斑あり近医受診、水疱みられ当科紹介。胸部、背部、上肢に紅斑や水疱あり、抗 BP180 抗体 159.5 U/mL、TARC 1,031 pg/mL であった。病理組織学的に表皮下水疱を認め、蛍光抗体直接法で表皮真皮境界部に IgG、C3 陽性にて水疱性類天疱瘡と診断。PSL 30mg/day から開始し、皮疹、抗 BP180 抗体、TARC は改善。

2. →演題 39 へ発表時間変更

3. →演題 23 へ発表時間変更

#### 4. (一般) Marie Unna hereditary hypotrichosis の 1 例

○千葉広夢 (ちば ひろむ)、神林由美、浅野善英 (東北大)、上杉恭弘 (上杉皮膚科医院)、下村 裕 (山口大)

3 歳、男児。出生時より毛髪が乏しいことを主訴に受診した。頭髪をわずかに認めるのみで、眉毛や睫毛は欠如していた。歯牙や爪の異常などの随伴症状はなかった。母親に同症を認めたが、成長に伴い頭髪のみ発毛がみられた。遺伝子解析にて、患児と母親の *U2HR* 遺伝子に c.1A>T (p.Met1Leu) のヘテロ接合変異が同定され、Marie Unna hereditary hypotrichosis と診断した。本症は常染色体顕性遺伝 (優性遺伝) の先天性毛髪疾患で、調べえた限りでは本邦からの報告は 3 例目である。

#### 5. (一般) 繰り返す下腿皮膚潰瘍から診断した IgG4 関連皮膚疾患の 1 例

○浅野和奏 (あさの わかな)、渡部大輔、福井玲矛、天野博雄 (岩手医大)、遠藤直樹 (矢巾町)

69 歳男性。数年前から両側下腿潰瘍を繰り返していた。初診時、左下腿後面に手掌大の黄色壊死を付す紅色潰瘍があり、徐々に拡大傾向だった。病理組織では真皮浅層の毛細血管の増生と多数の形質細胞浸潤、一部線維化があり、免疫染色では IgG4 陽性細胞が多数みられた。血液検査で高 IgG4 血症があり、IgG4 関連疾患と診断した。外用のみで潰瘍は上皮化した。本症例は戸倉らが提唱する IgG4 関連皮膚疾患に分類できない皮膚潰瘍を呈していたため報告する。

#### 6. (ス供) 多発性骨髄腫を合併した抗 TIF1- $\gamma$ 抗体陽性の皮膚筋炎の 1 例

○新田悠介 (にした ゆうすけ)、山川岳洋、石塚 大、齊藤陽平、河野通浩 (秋田大)、北舘明宏 (同血液内科)、高橋祐子 (中通総合病院)

75 歳、女性。初診 1 年前から掻痒を伴う皮疹が出現し、前医で外用加療も難治であった。当科初診時に顔面の紅斑、Gottron 徴候、V 徴候がみられ、近位筋の筋力低下、血清中筋原性酵素の上昇、抗 TIF1- $\gamma$  抗体陽性があり、皮膚筋炎と診断した。血清 M 蛋白を認め、骨髄穿刺にて多発性骨髄腫 (MM) の診断となった。ダラツムマブ、レナリドミド、デキサメタゾンにより、MM の部分奏効と皮膚筋炎の軽快が得られた。

7. (一般) 尿道を含めた切除を要した Queyrat 紅色肥厚症の 2 例

○安田正人 (やすだ まさひと)、齋藤晋太郎、山崎咲保里、中島瑞穂、小坂啓寿、荒木健、茂木精一郎 (群馬大)

73 歳男。3 年前から亀頭部に紅色皮疹あり。亀頭部外尿道口左側に角化を伴う 10x10mm 大の紅斑局面。5mm マージンで外尿道口の一部を含めて切除、分層植皮で再建した。72 歳女。既往に子宮頸癌。2 年前から外陰部に紅色皮疹あり。膣口周囲にびらんを伴う淡紅色紅斑局面。マッピング生検にて外尿道口周囲も陽性。7mm マージン、尿道を 1cm 含めて切除、単純縫縮した。尿道断端陽性で、X 線照射を追加。HPV56 検出。

8. 演題取り下げ

9. (ス供) トラフェルミンの使用により特異的な病理像を示した右第 3 趾有棘細胞癌の 1 例

○川口純之介 (かわぐち じゅんのすけ)、村田壺大、紺野恵理子、鈴木民夫 (山形大)  
86 歳、女性。近医外科にて右第 3 趾の潰瘍に対しトラフェルミンを使用した。拡大を認めたため当科を紹介され受診した。右第 3 趾から足背にかけて潰瘍を伴う 35mm 大の辺縁隆起する紅色腫瘍を認め、病理組織検査では腫瘍細胞周囲に著明な線維芽細胞と血管の増生を認めた。MRI で腫瘍の第 3 趾基節骨への浸潤を認めたため、中足骨基部での切断を行った。トラフェルミンが腫瘍の増生に影響した可能性があると考えられた。

10. (一般) 甲状腺乳頭癌の皮膚転移と考えた高齢男性の1例

○猪狩翔平 (いがり しょうへい)、平岩朋子、大塚幹夫、山本俊幸 (福島医大)

89歳男性。初診1年3ヶ月前、前頸部に結節が生じた。当科受診時、前頸部に17mm大の紅色結節を認めた。病理組織で、表皮直下から真皮内に囊腫壁様構造を形成する結節となっていた。結節内には大小様々の管腔構造組織や腺組織が認めていた。管腔内には好酸性の無構造物質がみられ、断頭分泌像と思われる所を認めた。免疫染色ではサイログロブリン抗体が陽性。初診の4年前に甲状腺乳頭癌の既往があった。

11. (一般) 血管拡張性肉芽腫を伴った石灰化上皮腫の1例

○向山竜人 (むかいやま りゅうと)、草野美沙希、山本俊幸 (福島医大)

10歳男児。数年前から左頸部に皮内結節があり、初診の6か月前に同部位の表面から10mm程度の紅色結節が出現した。当科紹介受診時、基部は直径15mm大の硬結を触れる皮内結節であり、その表面に10mm径の表面平滑な半球状の紅色結節を認めた。切除病理組織像では拡張した毛細血管の増生を認めると同時に、真皮中層から皮下組織にかけて石灰化が見られた。石灰化上皮腫の上に血管拡張性肉芽腫が生じたと考えた。

12. (ス供) 抗RNAポリメラーゼIII抗体陽性の強皮症患者に発症した栄養障害性皮膚石灰沈着症

○齋藤尚矢 (さいとう なおや)、六戸大樹、山下あや、松崎康司、中野 創、澤村大輔 (弘前大)、竹本啓伸 (つがる総合)

67歳、女性。抗RNAポリメラーゼIII抗体陽性の全身性強皮症患者。当科初診の4か月前に左前腕の虫刺部位を搔破したところ皮疹が出現し、増大傾向のため当科紹介となった。左前腕に25×15mm、20×20mm大の白色物が透見される弾性硬の皮下結節が2個あり、圧痛をみとめた。全切除検体の病理組織では、真皮内に好塩基性物質が塊状に散在しており、栄養障害性皮膚石灰沈着症と診断した。本症について、文献的考察を加えて報告する。

ランチョンセミナー (12:00～12:50)

共催：ブリストル・マイヤーズ スクイブ株式会社

座長 岩田 浩明 先生  
岐阜大学大学院医学系研究科 皮膚科学 教授

## 『 乾癬全身療法導入法

～デュークラバシチニブの立ち位置は？～ 』

安田 正人 先生  
群馬大学大学院医学系研究科 皮膚科学 准教授

アフタヌーンセミナー (13:00～13:50)

共催：ヤンセンファーマ株式会社／大鵬薬品工業株式会社

座長 浅野 善英 先生  
東北大学大学院医学系研究科 神経・感覚器病態学 皮膚科学分野 教授

## 『 掌蹠膿疱症診療における

## 医療連携の取り組み 』

河野 通浩 先生  
秋田大学大学院医学系研究科 皮膚科学・形成外科学講座 教授



## 【一般演題 II】 (14:00～16:00)

セッション 2-1 (14:00～15:00)

座長：赤坂英二郎 先生 (弘前大)

### 13. (一般) バリシチニブ内服が著効した円形脱毛症の 4 例

○瀬川康二郎 (せがわ こうじろう)、芳賀貴裕 (気仙沼市立)

光線療法、局所免疫療法、ステロイドセミパルス療法など、他の治療に抵抗性であった円形脱毛症の患者 4 例に対し、バリシチニブの内服を開始したところ、全ての症例で奏効した。性別は男女ともに 2 例ずつで、汎発型が 1 例、多発型が 3 例であった。今後、円形脱毛症の難治例に対しバリシチニブの内服治療を行う症例が増えると思われ、適応については今後も検討が必要であると考えられる。

### 14. (一般) 不全型赤芽球性プロトポルフィリン症 (EPP) 患者 3 例における長期観察

○三澤 恵 (みざわ めぐみ)、牧野輝彦、清水忠道 (富山大)

我々は以前軽度の光線過敏、プロトポルフィリン (PP) 値の軽度上昇、少数の蛍光赤血球がみられた 3 名の小児において、*FECH* 遺伝子変異が検出されないものの遺伝子多型 *IVS3-48C* を *homozygous* で有することを見出し不全型 EPP として報告している。今回我々はこの 3 症例の 5～9 年間の経過を観察しえた。1 症例では成長とともに PP 値は正常化し、他の 2 症例では PP 値の軽度上昇は持続した。3 症例の光線過敏症状の頻度と重症度は成長とともに徐々に軽減した。

### 15. (一般) 有棘細胞癌を複数発症し *LAMB3* と *ITGA3* にミスセンス変異を認めた接合部型先天性表皮水疱症

○小宮根真弓 (こみね まゆみ)、松崎友里江、山本史徳、安藤貴代、勝又文徳、佐藤篤子、神谷浩二、前川武雄、大槻マミ太郎 (自治医大)

60 代男。陰部、下肢の結節と潰瘍を主訴に当科受診。数十年間の切削油への曝露歴あり。陰部、大腿の結節は有棘細胞癌の診断にて切除、リンパ節郭清施行。両下肢を中心に色素沈着と脱失が混在、歯牙の異常、粗な毛髪、過剰な瘢痕形成から、先天性表皮水疱症を疑い遺伝子検査施行したところ、*LAMB3* と *ITGA3* 遺伝子にそれぞれヘテロでミスセンス変異を認めた。

16. (一般) 大阪大学皮膚科における栄養障害型表皮水疱症治療法開発

○玉井克人(たまい かつと)、菊池 康、森 志保、森坂広行、外村香子、種村 篤、藤本 学(大阪大)

大阪大学皮膚科外来には毎年約 100 名の表皮水疱症患者が来院している。過去 20 年間で我々が取り組んだ治療法開発研究は、健常家族骨髄由来間葉系幹細胞移植臨床研究、他家骨髄間葉系幹細胞移植臨床試験、骨髄間葉系幹細胞血中動員医薬レダセムチド臨床試験、レダセムチド検証臨床試験(実施中)である。また自家水疱由来間葉系幹細胞を標的とした遺伝子治療法開発を進めており、3 年後の臨床試験実施を目指している。

17. (一般) 遺伝子検査で確定診断した劣性(潜性)栄養障害型表皮水疱症の兄妹例

○奥田早紀(おくだ さき)、高橋隼也、古舘禎騎、神林由美、浅野善英(東北大)、皆川智子、赤坂英二郎、中野 創、澤村大輔(弘前大)

症例 1 : 70 代男性。症例 2 : 60 代女性、症例 1 の妹。ともに数十年来下肢の水疱、びらん、潰瘍を繰り返していたが、確定診断には至らず、定期通院せず自己処置を行っていた。難治性下肢潰瘍からの皮膚軟部組織感染症を契機に同時期に当科に入院し、それぞれ自己皮膚、自家培養表皮による植皮術を施行した。末梢血 DNA を用いた遺伝子解析で *COL7A1* の変異が検出され、劣性(潜性)栄養障害型表皮水疱症の確定診断に至った。

18. 演題取り下げ

19. 演題取り下げ

20. (一般) 沖縄に多発するカポジ肉腫

○高橋健造（たかはし けんぞう）、小濱 望、宮城拓也、山口さやか（琉球大）  
沖縄県や琉球諸島には、地理的、歴史的、人類学的特徴からか、他府県には稀な皮膚病が好発いたします。宮古諸島は世界的にも地中海領域に匹敵するカポジ肉腫の好発地域であり、人類学的にも興味深いことに、本邦では沖縄県外では北海道に多く報告されます。HHV8 の感染率の高さ、ウイルスの特異性、疾患感受性遺伝子の可能性を考えております。液体窒素、イミキモド、タキサン系抗がん剤、プロプラノロール等の治療例をご紹介します。

21. (一般) 生検後一時的に縮小した後に急速に増大した High grade B-cell lymphoma の 1 例

○山本美友貴（やまもと みゆき）、平岩朋子、山本俊幸（福島医大）  
60 歳女性。右頬部と右側頭部に紅色の結節が出現し、近医で生検して偽リンパ腫と診断された。病変は生検後縮小したが、4 ヶ月後に再発してステロイド局所注射が施行された。当科初診時は色素沈着のみ認められたが、1 ヶ月後に病変が増大して4×2cm の発赤を伴う硬結が出現した。生検組織では真皮から皮下組織にかけて濾胞構造を作らない腫瘍細胞がびまん性に増殖しており、FISH で MYC、BCL2、BCL6 の転座が認められた。血液内科で R-CHOP 療法が開始された。

22. (一般) 眼皮膚白皮症 (OCA) 2 型症例に見られた褐色色素性母斑

○鈴木民夫 (すずき たみお)、三橋善比古、岡村 賢、斉藤 亨 (山形大)

17 歳、女性。色白、金髪で出生し、OCA 疑いで 10 か月時に当科を受診した。その後、遺伝子診断にて OCA2 型と診断された。以後、定期的に外来通院していた。幼少時より右耳介後部に褐色丘疹があり、ゆっくり拡大し、8 x 7mm になったため切除した。病理組織所見は複合型色素性母斑であった。OCA2 型の病態について考察する。

23. (一般) 肉芽腫性口唇炎の 3 例

○福士花恋 (ふくし かれん)、原 憲司、村井正隆、滝吉典子、原田 研 (青森県立中央)、三上幸子 (青森市)、長島弘明 (青森市)

症例 1 : 57 歳女性、症例 2 : 50 歳男性、症例 3 : 22 歳女性。いずれも口唇や口腔粘膜の腫脹を主訴に当科を受診、生検より肉芽腫性口唇炎と診断した。症例 1、2 はトラニラストなど既存の治療で軽快した。症例 3 は既存の治療に反応せず悪化傾向を示したため、アダリムマブを試みたところ著効した。肉芽腫性口唇炎は難治であることが多く、治療法が確立していない。当院で経験した 3 例について報告する。

スイーツセミナー (16:10~17:00)

共催：アッヴィ合同会社

座長 原田 研 先生  
青森県立中央病院 皮膚科 部長

『 JAK 阻害剤登場後の  
アトピー性皮膚炎治療戦略 』

天野 博雄 先生  
岩手医科大学医学部 皮膚科学講座 教授

イブニングセミナー (17:10~18:00)

共催：佐藤製薬株式会社

## 完全治癒を目指した爪白癬治療 新規経口抗真菌剤ホスラブコナゾール

### 講演 1

座長 藤田 靖幸 先生  
市立札幌病院皮膚科 科長

## 『 ホスラブコナゾールを用いた爪白癬治療 ～外用剤治療からの切り替え症例～ 』

井上 剛 先生  
岩手医科大学医学部 皮膚科学講座 助教

### 講演 2

座長 花田 勝美 先生  
弘前大学 名誉教授

## 『 専門医なら爪白癬は完全治癒を目指して 可能な限り経口抗真菌薬を 』

常深 祐一郎 先生  
埼玉医科大学 皮膚科 教授

24. (一般) SJS/TEN に対するエタネルセプト療法

○阿部理一郎(あべ りいちろう)(新潟大学)

海外において、SJS/TEN に対する新規治療として TNF $\alpha$  阻害剤であるエタネルセプト療法の有用性が報告されている。本邦においてもステロイド全身療法により効果不十分であった SJS/TEN を対象に多施設共同試験が施行中である。当科にて同治療を行った症例を供覧する。

25. (一般) 自己炎症・自己免疫・先天性魚鱗癬パネル遺伝子解析を行なった慢性苔癬状粧糠疹の成人例

○金澤伸雄(かなざわ のぶお)、石原朋典、前尾和沙、天城今日子、横山聡子、北佳奈子、高瀬真由、井上裕香子、村田光麻、今井康友、夏秋 優、山西清文(兵庫医大)  
46 歳男性。20 年程前から全身に痒みを伴う落屑性紅斑が出現し、近医でアトピー性皮膚炎と診断され治療を受けるも難治であった。血液検査では LDH、TARC、IgE とも正常範囲内。RAST ではヤケヒョウヒダニとハウスダストにクラス 2。皮膚生検にて表皮基底層の軽度の液状変性を認め、慢性苔癬状粧糠疹と診断し、UVA1 さらにエキシマライトにて加療している。自己炎症・自己免疫・先天性魚鱗癬パネル遺伝子解析を行うも有意なバリエーションは見られず。

26. (一般) 四肢のリベドを呈した顕微鏡的多発血管炎の 1 例

○高田満喜(たかだ まき)、山本俊幸(福島医大)

44 歳、女性。X-3 年 9 月頃より、両下肢の紅斑と全身の関節痛が出現し、軽快・増悪を繰り返していた。X-1 年 10 月に血液検査で MPO-ANCA 陽性で、翌年当院リウマチ内科へ入院した。当科初診時、両上下肢に分枝状の暗赤褐色斑と、大腿に軽度浸潤を触れる褐色斑が見られた。手足のしびれ有り、腎臓・肺病変はなかった。大腿から生検を行い、真皮下層の血管壁にフィブリノイド壊死と好中球の浸潤を認め、内弾性板の断裂を認めた。

27. (ス供) 右大腿部に丘疹が癒合した浸潤触れる局面状のサルコイドーシスを呈した一例

○香川奈菜 (かがわ なな)、中嶋千紗、臼居駿也、加藤麻衣子、大塚篤司 (近畿大) 80代、女性。右大腿の疣贅状腫瘍を部分生検され有棘細胞癌として切除、植皮された。その後、創部周囲に丘疹が癒合した浸潤触れる紅斑局面が出現した。同部より部分生検され真皮浅層から深層にかけて多核巨細胞を伴う類上皮肉芽腫の増生を認めた。サルコイドーシスの皮膚病変は多彩な皮膚症状を呈するが今回右大腿部に丘疹が癒合した浸潤触れる局面状紅斑という稀な臨床像を認めたため報告する。

28. (一般) 当院で経験した化膿性汗腺炎の検討

○秋野萌子 (あきの もえこ)、瀬川優里恵、谷田宗男 (東北労災)

化膿性汗腺炎は慢性・炎症性・再発性・消耗性の皮膚毛包性疾患であり、腋窩や鼠径部、臀部などのアポクリン汗腺の多い部位に炎症性の結節と膿瘍を繰り返す。患者の生活の質を著しく障害するものの、その治療法の選択や導入のタイミングに確立されたものはなく難治性で再発することも多い。当院で経験した化膿性汗腺炎の患者背景や併存疾患、治療法などを検討し、文献的考察を加え報告する。

29. (一般) 過去2回の帝王切開術後の経過で壊疽性膿皮症を疑われ、3回目の再燃を認めた **post-cesarean section pyoderma gangrenosum**

○菊池信之 (きくち のぶゆき)、山本俊幸 (福島医大)

29歳女性。他院で第1子の帝王切開術後に縫合創が離開し、別の他院で施行された第2子の帝王切開術後にも縫合創が離開した。壊疽性膿皮症が疑われたため、当院産婦人科で第3子の帝王切開術を施行され、手術後に縫合創に疼痛を伴う浮腫性の紅斑が出現し、縫合創に穿掘性の潰瘍が出現した。当科を受診し、生検の病理像で真皮から皮下脂肪組織にかけて好中球が稠密に浸潤しており、壊疽性膿皮症と診断した。



11月5日（日曜日）

モーニングセミナー（10：00～10：50）

共催：ユーシービージャパン株式会社

## 改めて考える乾癬治療 ～Diversity in Psoriatic Disease～

座長 松崎 康司 先生  
弘前大学大学院医学研究科 皮膚科学講座 講師

講演1（10：00～10：15）

### 『 青森県立中央病院における乾癬治療の現状 』

滝吉 典子 先生  
青森県立中央病院 皮膚科 副部長

講演2（10：15～10：50）

### 『 乾癬と創傷治癒、 皮膚老化のアップデート 2023 』

夏賀 健 先生  
北海道大学大学院医学研究院 皮膚科学教室 准教授

ランチョンセミナー1 (11:00~11:50)

共催：協和キリン株式会社

座長 鈴木 民夫 先生  
山形大学大学院医学系研究科医学専攻 皮膚科学講座 教授

講演1

『 ルミセフの新情報と  
角化症の免疫プロフィール 』

秋山 真志 先生  
名古屋大学大学院医学系研究科 皮膚科学 教授

講演2

『 乾癬の外用療法と  
ドボベットフォームの使い方 』

山本 俊幸 先生  
福島県立医科大学 医学部 皮膚科学講座 教授

ランチョンセミナー2 (12:00~12:50)

共催：マルホ株式会社

### 講演1

座長 阿部 理一郎 先生  
新潟大学大学院医歯学総合研究科 分子細胞医学専攻細胞機能講座  
皮膚科学分野 教授

## 『 ピット治そう！単純疱疹 』

渡辺 大輔 先生  
愛知医科大学医学部 皮膚科学講座 教授

### 講演2

座長 川上 民裕 先生  
東北医科薬科大学医学部 皮膚科学教室 主任教授

## 『 アトピー性皮膚炎の かゆみの発症機序とその制御 』

椛島 健治 先生  
京都大学大学院医学研究科 皮膚科学 教授

アフタヌーンセミナー (13:00～13:50)

共催：ノバルティスファーマ株式会社

## 遺伝性と炎症性 ～角化症をめぐる冒険～

座長 清水 忠道 先生  
富山大学学術研究部医学系皮膚科学 教授

### 講演 1

## 『 遺伝性角化症：印象深い症例の紹介と解説 』

乃村 俊史 先生  
筑波大学医学医療系 皮膚科学 教授

### 講演 2

## 『 乾癬性関節炎とサイトカインの関わり

## ～乾癬性関節炎を IL17 で考える:末梢から体軸まで～ 』

森田 明理 先生  
名古屋市立大学大学院医学研究科 加齢・環境皮膚科学 教授

【一般演題 IV】 (14:00～16:00)

セッション 4-1 (14:00～15:00)

座長：藤村 卓 先生 (東北大)

30. (一般) 顔面に多発する血疱を伴った好酸球性多発血管炎性肉芽腫症の一例

○川上民裕 (かわかみ たみひろ)、池田高治、横山華英 (東北医薬大)

46 歳男性。初診 10 か月前、気管支喘息発症。4 か月前、好酸球性副鼻腔炎発症。2 か月前、顔面の皮疹に気づき皮膚生検で好酸球を伴う血管炎を認めたため紹介された。末梢白血球数 14400/ $\mu$ L、好酸球数 33.3%。顔面から耳介、手背の広範囲に血疱が多発していた。鼻漏などで労作時に呼吸苦あり。プレドニン 1mg/体重/日、シクロホスファミドパルスを開始した。その後、メポリズマブと免疫グロブリン大量静注療法を併用した。同様症例の経験あり。

31. (一般) 2022 年に経験した急性感染性蕁麻疹 5 例

○永谷 圭 (ながたに けい)、角田孝彦、吉岡千春、矢口順子 (山形市立済生館)、伊藤義彦 (山形市)

2022 年に当科で経験し D-dimer と FDP を調べた急性感染性蕁麻疹は 5 例あった。全例で D-dimer の上昇がみられたが、軽症の症例では D-dimer の上昇は軽度で FDP は基準値内であった。過去に本邦で報告された慢性蕁麻疹 53 例と近年報告された急性感染性蕁麻疹 9 例の D-dimer 値を比較したところ、慢性蕁麻疹では 10 $\mu$ g/mL 未満、急性感染性蕁麻疹では 10 $\mu$ g/mL 以上が多いことがわかった。

32. (ス供) ロドデノール含有医薬部外品による脱色素斑患者の経過について

○森 康記 (もり やすき)、梁川志保、古川真衣子、吉岡和佳子 (岩手県立中央)  
ロドデノール含有医薬部外品は美白化粧品として 2008～2013 年に自主回収されるまで発売されていた。結果として顔面等の難治性脱色素斑を引き起こし 19,609 名の被害者を生んだ。多くの被害者はメーカーと和解合意し、その内把握されている 11,924 名が完治やほぼ回復している。当科で約 10 年間通院している完治に至らない 2 人の女性患者を提示し、今後の同様の被害防止や化粧品の安全性向上について言及する。

33. 演題取り下げ

34. 演題取り下げ

35. (一般) 皮膚科遺伝外来における過去 10 年間の動向

○堺 則康 (さかい のりやす)、前田龍郎、川上 洋、原田和俊 (東京医大)  
東京医大皮膚科では、平成 19 年 9 月より遺伝外来を開設している。この 16 年間での医学・医療の進歩は目覚ましく、遺伝性疾患を取り巻く状況も刻々と変化している。そこで今回、皮膚科遺伝外来における過去 10 年間の患者数の変遷、および診療内容の変化を提示し、過去 10 年間の動向を分析した。これにより、今後の見通し、および求められる診療体制の構築について考察する。

36. (一般) 抗 BP230 抗体単独陽性の類天疱瘡

○氏家英之 (うじいえ ひでゆき) (北海道大)

水疱性類天疱瘡の主要な病原性抗体は抗 BP180 抗体であるが、抗 BP230 抗体の病原性についても研究が進められている。最近のモデルマウスを用いた研究では、抗マウス BP230 抗体が皮疹を誘導することが示された。臨床においても、稀ではあるが抗 BP230 抗体単独陽性の類天疱瘡症例に遭遇することがある。自験例を供覧し、抗 BP230 抗体の病原性について考察する。

37. (一般) タキサン系抗がん剤を用いた放射化学療法で加療した皮膚血管肉腫 90 例: 多施設共同研究後ろ向き解析

○藤村 卓 (ふじむら たく)、神林由美、前川武雄、伊東孝通、加藤裕史、松下茂人、吉野公二、藤澤康弘、橋本 彰、浅野善英 (東北大)

国内 7 施設で 2010 年以降経験した皮膚血管肉腫 90 例に対するタキサン系抗がん剤を用いた放射化学療法の成績についてパクリタキセル 55 例、ドセタキセル 35 例を検討した。Wald 検定で全生存期間に影響する因子を検証したが、腫瘍サイズを含めて上記に影響を与える因子はなかった。本研究によりドセタキセルはパクリタキセルに比べて有効性・安全性において非劣性であることが明らかとなった。

38. →演題 4 へ発表時間変更

39. (ス供) 胃アニサキス症に伴う遅発性アナフィラキシーショック

○原 憲司 (はら けんじ)、原田 研、福土花恋、滝吉典子 (青森県立中央)、島谷孝司 (同消化器内科)

47 歳女性。家族で寿司屋を経営。20XX 年 5 月、賄いとして海鮮丼 (サバ、マグロ、ウニ、サーモン)、アジのなめろう、味噌汁を摂食。数時間後より全身に膨疹出現、心窩部痛、嘔気も認めためアナフィラキシーショックとしてアドレナリン筋注後、当科入院。速やかに膨疹は消褪するも心窩部痛が持続したため、上部消化管内視鏡を施行しアニサキスを検出。アニサキスアレルギーは海産物の大幅な制限が必要なため患者指導が肝要である。

40. (一般) 青森県で大規模発生した **creeping disease** のまとめ

○寺田明莉 (てらだ あかり)、六戸大樹、三上花子、中野 創、澤村大輔 (弘前大)、石川博康 (八戸市)

**Creeping disease** は淡水魚の生食を契機に寄生虫の幼虫が人体に侵入し、皮膚～皮下を移動することにより生じる。2022 年 9 月から 2023 年 1 月にかけて、青森県三八上北地方を中心にシラウオの生食によると考えられる本症が多数発生した。本邦での過去最大規模となった今般の **creeping disease** 発生についてまとめるとともに、文献的考察を加えて報告する。

41. (一般) 40 年間経過を観察している **Papillon-Lefevre** 症候群 (PLS) の姉弟例

○野村和夫 (のむら かずお)、近藤直子 (弘前市)、橋本 功 (八戸市)

現在、姉 46 歳、弟 44 歳の PLS 姉弟例について、1 歳前後から現在までの皮膚所見、歯症状、易感染性、その他の随伴症状などの推移、姉弟間の差異、治療等について述べる。掌蹠の過角化は 1 歳前に始まり、現在でも基本的には不変であるが、仮性絞厄輪の顕症化、二次的な骨変化もきたしてきている。四肢には乾癬様の角化性紅斑が出没するが、季節変動を伴う。歯は、弟は 20 歳台に脱落したが、姉は現在でも大部分は保存されている。



スイーツセミナー (16:10~17:00)

共催：大鵬薬品工業株式会社

座長 氏家 英之 先生  
北海道大学大学院医学研究院 皮膚科学教室 教授

『 日本皮膚科学会診療ガイドラインにおける  
抗ヒスタミン薬の位置づけ 』

保科 大地 先生  
小樽市立病院 皮膚科 医療部長